外国语言学与
应用语言学博士文库

人名と社会

——青島市某孫氏宗族の考察に基づいて

王爱静 著

人名与社会

中国海洋大学出版社
CHINA OCEAN UNIVERSITY PRESS

人名与社会

王爱静　著

中国海洋大学出版社
青岛

图书在版编目(CIP)数据

人名与社会：日文 / 王爱静著. —青岛：中国海洋大学出版社，2009.12

ISBN 978-7-81125-377-1 (2010.3 重印)

I.人… II. 王… III. 姓名学—研究—日文 IV. K810.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 224484 号

出版发行 中国海洋大学出版社

社　　址 青岛市香港东路 23 号　　**邮　编** 266071

网　　址 http://www.ouc-press.com

订购电话 0532-82032573(传真)

责任编辑 丛溪　　**电　话** 0532-85901087

印　　制 日照报业印刷有限公司

版　　次 2009 年 12 月第 1 版

印　　次 2010 年 3 月第 2 次印刷

成品尺寸 158mm × 234mm　1/16

印　　张 11.75

字　　数 260 千字

定　　价 26.00 元

序

一

思い出話から始めさせていただきたい。

私は王愛静さんが大阪大学大学院言語文化研究科に在学中、王さんの指導教員を務めていたが、それはある偶然によるもので、しかもその期間はそれほど長いものではなかった。ある年、王さんのもとの指導教員が一年間の在外研究に出かけたため、私がその代りを務めることになったのだ。しかしその一年の間に、王さんは本書のもととなる博士論文を書き上げてしまったのである。

私はイギリスの旧植民地の作家による英語文学やそれに関連する理論、一般にポストコロニアル文学やポストコロニアル理論と呼ばれる分野をおもな専門にしている。この分野でも、地名や人名の「名づけ」という行為の社会文化的な意味はしばしば議論されてきたが、中国の歴史や社会、言語や文化については、私はけっして専門家ではなかった。そこで私たちは、指導教員と指導学生という関係にあったものの、中国のことは王さんに教えてもらい、理論的観点や分析法は私が助言するというようにして、お互いに教え合いながら、二人三脚のような格好で論文を完成に導いて行った。添削や書き直しを繰り返し、私は何度も原稿の書き直しを求めたが、王さんはそのたびに見事な改訂版を作り上げてきた。今では懐かしい思い出である。

このようにして完成された論文が一冊の本に生まれ変わることは、私にとっても我がことのように喜ばしい出来事である。

本書に盛り込まれたさまざまな興味深い調査、分析、知見の詳細は直接本文に当たっていただきたいが、その全体は、中国青島市の都市部と村落部とに分かれ住んでいる一宗族の「名づけ」の行為を綿密に調査し、その変化の意味を現代中国の社会文化的な変容との関連において考察したユニークな研究である。その７つの章を駆け足で紹介するなら、第１と第２章で先行研究を検討し、調査対象を概観した後、

第３章では、二つの対象地域における人名変化について、住民簿や族譜などの資料調査をもとに、統計的な分析・整理を行っている。そして、これらのデータを踏まえつつ、第４章では、現代中国の政治的・社会的変化と人名変化との関係を分析し、第５章では、二つの対象地域の相違点およびその背景を考察している。第６章は、現地での聞き取り調査をおもな材料に、「名づけ」行為における個々人の意識や選択という側面に光を当てる。第７章は、論文全体を総括した結論となる。

王さんの研究の一つの特色は、その綿密な調査にあり、それが本書に第一級の資料的な価値を与えている。また、「名づけ」と現代中国の社会史との関連を分析するに当たっても、国家的な政策、市や村の単位、それぞれの場における宗族の歴史など、さまざまなレベルから総合的に論じているため、その分析に分厚い説得力が与えられている。個々人の「名づけ」の実践についても、それが中国社会の大きな変動に影響されると同時に、そこに巧みに対応しながら能動的に行われてきた状況を、立体的に浮かび上がらせている点が魅力的だ。最後に、都市部と村落部との比較分析により、中国における伝統の維持と近代化との関係が、複雑かつ交錯する変化であることを主張しているところも、伝統と近代化という普遍的な問題を考える上で、傾聴に値する議論である。

あるとき、私の研究室で、王さんと私は、私たちの子供たちの「名づけ」についても語り合ったことを覚えている。「名付け」という行為は、そのように、すべての個人にとって身近で重要な意味をもっているが、それはまた、社会や文化の動きを映し出す鏡でもあり、さらに言うなら、その社会や文化を守ったり変えたりしようとする、人々の願いや意志をも含んでいる。

「名づけ」の行為を通して中国社会を見つめた王さんのこの研究が、本書の読者にとって、中国の社会と文化や、そこに生きる人々の生活の意味に、新しい光を当てるものであることを期待したい。

大阪大学大学院言語文化研究科
木村茂雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二

前不久收到王爱静博士的来信，说她在大阪大学的博士论文即将在中国出版，并希望我来作序。我从心里为她高兴，不禁想起了2004年我第一次在我的研究室见到她的情景。

那时她是大阪大学的在读博士生，结束了在中国山东青岛做的有关起名实践的人类学田野调查，准备执笔博士论文。听了她的博士论文框架和章节设计，我坦率地提出了参考意见。王爱静博士随后对论文框架作了调整，并做了补充调查。王爱静博士的认真、执著给我留下了很深的印象。

2005年王爱静博士在国立民族学博物馆做了一年外来研究员，参加了我主持的『中国的社会变化及再构筑：革命的实践与表象』的共同研究课题组，并且作了题为《中国青岛的社会·文化变容及起名的实践》的研究报告。她对中国城乡的起名实践的比较研究受到了与会人类学者的好评。

王爱静博士作为年轻的人类学者准确地把握并继承了欧美、中国以及日本人类学的研究脉络，并从个人实践这一崭新的理论角度以及城市和乡村的比较方法为我们揭示了从社会主义革命的20世纪走向全球化的21世纪时中国的起名文化的延续及动态。

我衷心祝贺王爱静博士的大作出版，并相信此书的出版不仅为中国人类学的发展提供新的资料和理论角度，而且也将成为未来比较研究的经典之一。

韩　敏

2009年7月21日于日本国立民族学博物馆

目次

第1章　序論　*1*

1.1　中国に関する人類学的研究　*1*

1.2　中国人名に関する先行研究と問題点　*12*

1.3　本論文の目的と研究方法　*15*

1.4　本論文の構成　*18*

第2章　調査地・調査対象の概況と名づけの習俗　*20*

2.1　青島市の概況　*20*

2.2　青島市孫氏宗族の形成と歴史　*21*

2.3　調査地の概況　*22*

2.4　名づけの習俗　*25*

2.5　孫氏宗族の「命名定式」　*34*

第3章　集計からみる人名形態の時系列的変化　*42*

3.1　人名形態の10年ごとの年代変化　*42*

3.2　人名形態の社会・政治の時期的変化　*57*

第 4 章　人名変化の社会的・文化的背景　*72*
4.1　建国以前の名づけと宗族組織・宗族活動　*72*
4.2　第 2 期 建国初期　*85*
4.3　第 3 期 文化大革命時期　*97*
4.4　第 4 期　経済改革前期　*105*
4.5　第 5 期　改革開放の深化期　*113*

第 5 章　人名変化における峰村と塩町の地域差　*129*
5.1　人名形態の時系列変化における両村の相違点　*129*
5.2　人名変化における地域差の背景分析　*132*
5.3　まとめ　*139*

第 6 章　社会変化の中での個人の名づけ実践　*140*
6.1　年配の名づけの実例分析　*141*
6.2　30 代の若者たちの名づけの実例分析　*157*

第 7 章　結論　*162*

参 照 文 献　*168*

あとがき　*174*

第1章

序　論

本論文は、文化人類学の手法で中国青島における社会的・文化的変容と名づけの実践を考察するものである。これに先立ち、本章では、中国に関する人類学的研究および人名に関する先行研究を検討したうえで、本研究の分析視点・研究対象・研究方法を提示する。

1.1　中国に関する人類学的研究

まず本節では、15 世紀から現在までの中国に関する人類学的研究の流れと現在の動向を記述する。

1.1.1　共産党政権以前の中国に関する人類学的研究

15 世紀に始まった大航海は、非西洋世界の文化に関する膨大な資料をヨーロッパにもたらした。これをきっかけに、人類とは何か、文化とは何かという、より普遍的な問題に対する関心が高まるようになった。ただ、このような知的関心の前提には自らヨーロッパ人を「人類」とする考えがあった。19 世紀になると、ウォレスやダーウィンが唱えた生物進化学説は人類学者によって社会科学に取り入れられ、人類の文化は低い段階（蒙昧）から高い段階（文明）へと進化していくとする進化主義が唱えられた。そして、世界諸民族の文化をこの枠組みで

分類し、位置付ける試みがなされた。つまり、進化の頂点には当時の欧米の近代文明が想定され、それと相違する度合に応じて世界の異民族のさまざまな文化が順次低い段階におかれることとなった。このような「西洋中心主義」や「人種主義」の思想が発達・普及したため、綾部（1984）や江淵（2000）など多くの人類学者が指摘してきたように、先住民の文化の多様性を無視して十把一絡げに「野蛮人」「未開文化」とする異文化認識が19世紀まで広く一般的なものとされた。

20世紀前半、文化人類学は、進化主義に内在する西洋中心主義を排し、文化相対主義の立場から自他の文化を相対的に捉えることを唱えた。また、機能主義や文化様式論など、文化の諸側面の相互関連を重視する全体論的アプローチ、そして、マリノフスキーが創出したフィールドワークに基づく実証的研究の方法論が確立された。この時期の人類学の主たる関心は、相対的に孤立した大陸の奥地や島嶼部など、文化的境界や輪郭が比較的分かりやすい小規模な社会の構造の究明にあった。そのための方法として、親族名称、出自規定、婚姻規定、居住規定など、一般に親族組織論と呼ばれる研究や、未開社会の政治組織の研究などが盛んであった。しかし、当時の文化人類学は、世界文明の「中心」から距離的に遠く離れた「周縁」に位置する、いわゆる「未開社会」や「無文字社会」を主な対象として、その研究の成果を中心に理論が構築されていたといえる。また、先住民の文化は西洋文化との接触によって消滅の危機にさらされていると考えられ、先住民の文化的環境は変容しつつも伝統文化の基本的な構造はしたたかに生き残るという側面にはあまり関心が払われなかった。

同様に中国も、欧米という「中心」社会から見れば、「周縁」的な存在であった。中国を対象とした社会学・人類学的研究は、19世紀末までさかのぼることができるが、それは主に Smith(1894、1899)に代表されるアメリカ宣教師による中国農村の研究や中国人論である。Smith（1894）は中国における長年の生活体験を通して観察した中国人の気質を論じたものであり、Smith (1899) は「小帝国」である村落の制度・慣習・家族生活について述べたものである。しかし、Smith の究極の目的は中国をキリスト教国にすることにあり、当時の西欧人としての強い偏りが見られる。同時代の中国研究として、ほかに、De Groot (1892

- 1910)、Kulp(1925)が挙げられる。De Groot (1892 - 1910) は中国の生活の隅々まで影響を及ぼしている宗教について論述している。この研究では「西欧の学界を風靡していた進化論的色彩は希薄である」(末成 1995 : 85) と評価されているが、中国を「半未開」と表現している点には西欧の思想的背景の影響が見られる。Kulp(1925)は家族主義の概念で広東省の農村を論じている。

1920年以降、ミッション系大学の社会学系に、米国留学帰りの中国人研究者が加わり、「社会学の中国化」を提唱した。このようにして、30年代以降、費孝通と林耀華を代表とする中国人研究者が育っていった。その代表作には、英文で書かれ海外で出版された Fei (1939) と Lin (1947)、および中国語で書かれた林耀華 (1936)、費孝通 (1947、1948) がある。林耀華 (1936) の福建省義序における宗族[1]の分析は、その後の Freedman のリニージ・モデルに間接的な影響を与えることとなる。費孝通 (1947、1948) はイギリスの社会構造論と当時のアメリカにおける文化パターン論を結合させ、中国社会関係の特徴を、「社会圏子」および「差序格局」[2]の概念で説明しており、中国伝統社会構造を体系的、かつ簡潔に分析している。日本人による中国社会構造に関する研究も数多くある。たとえば、仁井田 (1951) による北京の商業ギルドの分析、清水 (1939、1942) の旧中国社会の構造的特質の分析、牧野 (1944、1949) の家族研究などである。そのほか、河北省・山東省を中心に1940～43年に行われた農村慣行調査 (戦後『中国農村慣行調査』(1952～58) と題して公開された) の大量な資料がある。慣行調査の目的は「中国の民衆が如何なる慣行のもとに社会生活を営んでいるか、換言すれば，中国社会に行われている慣行を明らかにすることによって其社会の特質を生けるがままに書き出すこと」(「末弘博士の

1 中国漢民族の父系親族集団。広義には、婚姻が禁じられ養子もそのからとることがのぞましいとされる同姓の範囲をさすこともあるが、通常は社会的、経済的な機能を実際に備えているものをいう。その主な機能は、祖先祭祀、宗祠や墓地或は基本財産としての族産の共有運営、家譜の刊行などである。

2 費では中国における社会関係の特徴を、「社会圏子」としてイメージしている。他者との関係は、各個人を中心とした社会圏子が互いに接触する中で切り結ばれる。それは、水面の波紋が同心円状に押し広がるなかで他の波紋と重なり合うさまに似ている。また、中国の私人関係では、二者間の「差序」(差異) に基づいて行為者がどのように振舞うべきかが規定され、こうした二者関係の蓄積が「格局」(秩序) を構成する、と分析している ([1947]1998 : 24 - 30)。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

調査方針」）にあった。ただし、プロではない日本人大学生による、通訳者を通じた戦中の調査という点で、農村の深層構造や農民の本当の考えを引き出すことは困難ではなかったかと思われる。社会構造を論じる研究のほかには、陳（1937）の婚姻史の研究、永尾（1940、1941、1942）の風俗慣習の研究、Stein（1942）の中国人の世界観と宇宙観を論じた研究などがある。

漢民族研究のほかには、蔡元培（1926）（雑誌『一般』「説民族学」）をはじめ、少数民族を対象とした民族学が中国国内で発展しており、少数民族の歴史や習慣、親族関係を明らかにし、国内各民族の系統的分類を目指していた。

1.1.2　共産党政権以降80年代までの中国に関する人類学的研究

社会主義政権成立（1949年）以降の1952年から1978年まで、中国本土では社会科学は全て否定、停止されていた。そのため、人類学・社会学の調査研究の舞台は、香港や台湾に移された。本土に関するそれらの研究はほとんど資料によるものである。たとえば、内田（1956）は中国農村慣行調査の資料を元に、中国農民の家族制度の実態を分析した。Yang（1961）は、中国民間信仰の社会的・政治的機能および中国の宗教世界における特殊性を分析している。この時期の中国研究として特筆すべきなのは、「中国研究者の『先祖』となった」（末成1987：273）Freedmanが、英文および仏文で書かれた文献資料を渉猟し、英国の社会人類学におけるアフリカ研究の中心的テーマであった単系出自モデルに照らし、非対称的な分節構造をもつ東南中国の父系「リニージ」のモデルを作り上げたことである（1958、1966）。Freedmanは東南中国にとどまらず、政治制度なども介して全体社会と関連させながら中国の宗族社会を捉えてゆこうとした。Freedman（1966）は「人類学としては画期的な著作であり、現在なお人類学における中国研究の最良の入門書としての地位を失っていない」（末成1987：261）とされる。そのほか、Skinner（1964、1965）も本土での人類学的な研究に理論的に大きな影響を与えた。Skinner（1964、1965）は、従来村落が完結した共同体の最小単位として考えられていたのに対して、マーケットタウンを中心とした複数の村からなる市場共同モデルを提示した。

彼は、10数年後、市場圏の研究の延長線に中国の都市研究も発表している（Skinner：1977）。そのほか、多賀（1960、1981、1982）の宗譜の研究もある。

以上のような1980年代までの中国研究は、簡略に下記のようにまとめることができよう。1920年代以前、アメリカ宣教師が西欧の目で中国人を論じた。それ以降、外国人および欧米留学経験のある中国人研究者が宗族構造や社会関係の分析、フィールドワークに基づく中国農村社会における慣習の調査を行った。そして、本土で社会科学が禁じられた時期にも、外国人によって香港・台湾での研究が続けられ、その中で、Freedmanのリニージ研究は宗族研究の古典となった。しかし、これらの研究は欧米で発展した理論や方法を基に、中国の親族構造、社会構造を解明しようとしたものが主軸であり、内部・外部変化の影響による社会的・文化的変化の研究はほとんどなされていない。

中国本土の社会科学は、政治的理由により、1952年から1978年まで26年間の空白があった。しかしこの間、中国では、共産党政権下での土地改革、文化大革命などの政治運動が展開し、国家イデオロギーから庶民の普通の生活にいたるまで大きな変動が続いていた。そして、70年代末に打ち出された改革開放による社会の変化は、80年代以降社会変動に関する研究を産出する契機となった。

1.1.3　改革開放後の中国に関する人類学的研究

1970～80年代、世界史は激動の時代に突入した。植民地主義の終焉、新興独立国家への再編、ソビエト連邦の崩壊などの大転換を経て、現代世界は、世界経済システムとグローバル・テクノロジーに支えられた「地球時代」を迎えるに至ったのである。異文化が流入することによって在来の文化が変質を余儀なくされるという状況が世界各地で顕著になっている。

こうした背景のなかで、文化人類学の対象として、かつての「未開社会」のような、文化的境界が比較的はっきりと孤立した社会はほとんど姿を消し、文明の「中心」と「周縁」も相対化されつつある。文化の変化についての関心が深化し、主題も方法も多様化している。

コロニアリズムの時代の文化人類学でも、文化変化の研究は行われ

たが、それらの研究は、西洋文化の影響による伝統文化の崩壊と消滅という、西洋中心的視点からのものが大部分であった。これに対して、ポストコロニアル時代の人類学は、同じ文化変化の研究でも、産業化の進展と共に激化する地球規模の人と文化の移動の問題，異文化と交わることによって在来の伝統文化が活性化されたり、新しい文化が発展したりする現象に大きな関心を寄せるようになっている。

中国においても、1980年代以降、激動の時代が訪れた。文化大革命が終わり、農村では集団生産組織である人民公社が解体され、家庭請負制の改革開放政策が打ち出された。経済改革開放とともに、社会学・人類学を始めとする社会科学も再建されるようになった。先述したように、80年代以前の研究は、主に親族構造や社会構造の解明であった。80年代以降も、石田（1986）、Waston（1988）、袁少芬・徐傑舜（1989）、路遥・佐々木（1990）など、漢民族の社会構造の研究があるが、社会主義革命や改革開放などによる社会の変化がより注目されるようになった。たとえば、Croll（1981）は伝統的慣行、イデオロギー、経済政策という点から1950年の婚姻法以降の中国の婚姻の変化を分析した。Davis(1983)は社会主義革命における老人の地位の変化を論じている。当初は、住み込み調査に対する制限などの制約から、現地での聞き取り調査と文献調査とを合わせたものが多かったようである。これと異なり、中国人によるフィールドワークに基づき、古典的なスタイルのコミュニティ・スタディもいくつか発表されるようになった。たとえば、広東省新会県におけるSiu(1989)、福建省厦門近郊におけるHuang（1989)、遼寧省海城県における聶（1992）の研究などである。これらの民族誌に共通して見られることは、以前の民族誌が農村社会の共時的な構造－機能分析を目指していたのに対し、数十年のタイム・スパンにおける通時的な構造－機能分析を行っている点である。

80年代以来、中国の社会はあらゆる面で変化が見られる。農村においては、経済の改革、国家権力機構の浸透、計画出産の実施などがそれぞれ従来の村落伝統文化に影響を与えている。90年代以降の中国研究の課題は社会構造・農村慣行の解明から社会的・文化的変容の解明へ重点が移されている。とくに中国の農村における親族構造・人間関係などの研究は、産業近代化におけるその変容過程と要因を究明しよ

うとするものになっている。その成果としては、中生（1990）、王滬寧（1991）、聶莉莉（1992）、陸学芸（1992）、富田（1993）、韓敏（1994、2001）、秦兆雄（1999、2001）、王銘銘（1997）、折暁葉（1997）、蕭紅燕（2000）、潘宏立（2002）、佐々木・柄澤（2003）などが挙げられる。

たとえば、王滬寧（1991）は、全国15か村の事例調査に基づき、家族の構造と機能の変容を分析している。聶莉莉（1992）は民国・満州時代、土地改革時期、人民公社時期、経済体制改革以降と、時代別に親族組織の変容を記述・分析している。これらの研究は、伝統が近代化するにつれて一方的に消滅するという視点を取っていない。王滬寧（1991）は家族文化が近代化により消滅に向かう歴史的趨勢にあることを認める一方で、逆に社会変動のあり方を規定しなおす力が依然保持されていることも指摘している。聶莉莉（1992）も、経済的・政治的な変動を通じて、農村での「系譜関係による相続関係」、「家族内の礼儀、老人の地位」などの伝統な家族関係は大きく変化したのものの、「内外」「上下」「遠近」の秩序を持つ伝統的社会構造及びその秩序を強く意識する価値体系は「新しい社会環境の中に根強く存在している」こと、伝統的なものの中には、「形式的にはかなり変化していても実質的に変化していない」ものもあると指摘している（聶 1992：299 - 300）。また、韓敏（2001）は中国家族の内部構造や認識などの家族制度は、50年間の社会主義革命の中で連続性を保っていると指摘している（韓 2001：206 - 210）。さらに、潘宏立（2002）で示されているように、閩南農村社会では、1980年代中期以降、家廟・祀堂の再建、族譜の再編、祖先祭祀の再開などによって、宗族をはじめとする伝統的社会組織が急速に再興し、地域社会において大きな存在になった。ただし、80年代および90年代の宗族組織は決して50年代におけるそれの復元ではなく、祖先祭祀、リーダーシップ、国家との関係のありかたなどの面で時代的な特徴が見られる。ほかにも、伝統的な親族集団と社会的ネットワークを再統合した新たな「伝統」的構造を再構築するという「伝統の再創造」の報告も王銘銘（1997）、折暁葉（1997）に見られる。

90年代以降の中国社会科学は、「社会の変容を伝統から近代という単線的、一方向的な変化と見ないという点」（佐々木 1999：36）で大きく評価されよう。つまりそこでは、中国の社会変動が「複雑かつ交

又的過程」（鄧 1999：85）として、「伝統から現代への転換があれば、現代から伝統へ、伝統から伝統へ、現代から現代への転換もある。」（鄧 1999：85）というダイナミックな視点から捉えられている。

上に挙げた研究のほとんどは、対象村落あるいは宗族を一つの単位として捉え、その全体像のイメージ変容や構造上の変化を明らかにしようとしたものである。そして、その伝統変容の要因を中国政治・経済政策の実施など「外部」のより大きな環境からの影響に求めている。たとえば、木下（1999）は、祖先－家族－個人の連関が薄れたという変化は「政治的要因を根本原因にして、産業化によって促進され、表面化した」（木下 1999：94）と指摘している。潘宏立（2002）も、宗族組織の再興の要因を政治面・経済面から分析している。しかし、社会の変化の中で個人がいかに対応したのか、個人の行為が社会にどのような影響を与えたのかについてはほとんど注目されていない。それらの研究はたとえ個人の行為を扱っていても、それは外部からの変化の呼びかけあるいは文化習慣に応じて個人が行う行為にすぎないものとして位置付けられ、個人の主体性は充分に扱われていない。

1.1.4 現在の研究動向：「日常的実践」理論による研究

個人は社会から一方的に変化を強要されるものとする捉え方は、結局、従来の人類学の「社会：個人」の二元論に陥ってしまう。レイヴによれば、「社会：個人」二元論においては、社会と個人がそれぞれ自律した分析単位として分離され、社会は「マクロ構造の一つの集まりがある所であり、そこに生まれた個々の人間が内化すべき一つの既成事実である」（Lave1995[1988]：11）とされてきた。個人は社会化の過程を通して社会からの作用を受けるとされるが、個人が社会に働きかけて社会を変化させてゆく余地はなかった。つまり、社会化の過程で、文化が個人に一方的にプログラムされるとみなされる。この「社会：文化」二元論のために、個人が社会と文化に及ぼす作用について説明することができない（大村 2002：78）。「社会：個人」の二元論を批判した上で、レイヴは社会と文化と個人が、日常的実践を軸に展開される弁証的関係にあることを示した。現実の日常的実践では、文化と社会構造としての社会からなる構成的体制に常に埋め込まれている個人

は、その構成的体制によって動機付けられ、それに臨機応変に対応したり、それを利用したりすることによってはじめて実践を展開することができるという意味で、構成的体制によって構成されている。しかし、同時に、構成的体制は、間接的であっても、その個人の実践によって常に影響を受けるという意味で個人によって構成されている。文化、社会、個人の三つの要素は、どれか一つが他の要素を決定付けているわけではなく、相互が相互を構成しあいながらさまざまな活動を次々と生み出してゆく動態的関係にあり、弁証法的関係にあるのである（大村 2002：88）。

レイヴが提示した社会・文化と個人の弁証法関係の概念は、中国社会・文化の変化を論じる際にも有効であろう。というのも、伝統社会や文化の変化の姿は政治・経済改革がもたらした結果だけではなく、個人が社会的実践を通じてそれらの変化に戦略的に対応しながら、また同時に社会に影響をおよぼした結果でもあるからである。個人が社会に働きかける「実践」を理解するために、以下はピエール・ブルデューの実践理論と田辺の日常的実践の概念に簡単に触れておきたい。

ブルデューの実践理論は、ハビドゥスと実践感覚および戦略によって基礎付けられる。「ハビドゥスとは、持続性をもち移調可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造である」（ブルデュー1988[1980]：83）。ブルデューのこの定義を、田辺繁治は以下のようによりわかりやすく説明している。つまり、生活の諸条件を共有する人びとの間には、特有な知覚と価値評価の傾向性がシステムとして形成され、それがハビドゥスと呼ばれる。ハビドゥスは、その集団のなかで持続的、かつ臨機応変に人びとの実践と表象を生み出していく原理である。したがって、それは人びとの実践を特有な型として組織化していく構造である。しかし、このハビドゥスの構造は人びとの実践に制約と限界を与える構造でもある（田辺 2003：69 - 70）。ブルデューによれば、ハビドゥスとは社会関係のなかで構築され、社会的行為者としての個人の実践を説明する概念である。それは個人が持っている身体化された傾向性の集合であり、ある社会的ゲーム（社会的営み）に参加している人びと、つまり社会集団のなかで構築され

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com